

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人

小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707

E-mail square@kohitsuji.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人

印刷所：S R S株式会社

定 価：一部 30 円

2014年 11月 20日

第 378 号

クリスマスの物語

理事長 稲松 義人

今年も小羊学園の各施設ではクリスマスを迎えるための準備がはじまった。クリスマスに限ったことではないが行事の準備に忙しくしていると、文字通り「心を亡くしてしまっている」と反省させられることがある。

NHKの大河ドラマは、昨年の「八重の桜」に続いて、今年の「軍師官兵衛」も(録画で見ることがほとんどであったが)忙しい生活の中でちよつとした楽しみであった。歴史上の事実をもとにした物語であるが、幕末や明治維新の物語はこれまで、坂本竜馬や西郷隆盛など、いわゆる明治維新の政府を担った側の人たちのサイドから見ることが多かったように思う。「勝てば官軍、負ければ賊軍」と言われるが、その捉え方からすると、「賊軍」とされてしまった会津藩のサイドからみた「八重の桜」はこの時代の歴史ドラマとして私には新鮮だった。また今年も、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という流れで見ることの多い戦国時代を、日本の歴史では脇役となりがちな黒田官兵衛を軸にして描かれたことと、私が兵庫県出身ということもあり興味を惹かれた。

クリスマスは、イエス・キリストの誕生

を祝う行事である。今はキリスト教と関係ないところでもお祝いするようになってきているが、もともとのクリスマスであるイエス・キリストの誕生を伝える物語は、聖書の中に記されている。イエス・キリストの誕生も世界の歴史の中の事実であるが、実際のところ、イエスがどのような状況で生まれてきたのかは、タイムマシンでもないかぎり、まざまざと見ることはできない。私たちはそれを聖書に記された物語として知っている。聖書は、イエス・キリストの誕生をどのように伝えようとしたのであろうか。約2000年前のユダヤの国(今のイスラエル)で誕生したとされるイエス・キリストの物語(福音書)は、イエスが復活し昇天してから数十年後に記されたようだ。その時代の人たちにとってイエス・キリストの誕生はどんな意味があつたのだろうか。

聖書の物語は、旧約聖書の時代から時を大きく隔て、それも様々な立場の人たちによって書かれたものが一冊にまとめられている。聖書に収められた物語の一つひとつは、その時代に生きた人たちの物語でもあるが、聖書全体は、神と人間との関係の物語だと言えるのではないかと思う。天地創造からはじまり、人類の歴史と重ね合わせながら、神と人間との関係がどのように展開してきたのか記された壮大な物語である。イエス・キリストの誕生は、この神と人間との関係を伝える物語において大きな

転換点となっている。

ユダヤの人たちは、古くから目に見えない神との関係を求めた。それは自然においても国際関係においても過酷な環境の中で生きてきたからではないだろうか。自らの存在の意味を問わざるを得ないような状況の中で神との関係の確信を切望した。神から与えられた律法を守り、自らを整えることで神の祝福を信じて平安を得ようとした。

しかし、すべての人がその祝福を受けることはできなかった。むしろ、祝福から外された人たちは人間社会の中で蔑まれて生きることを強いられた。

イエスは、そんなこの世で小さくされた人たちに向けて「神は我々と共におられる」という神からのメッセージとして誕生したとクリスマスの物語は伝える。歴史の中で、イエスは虐げられ、罵られ、裏切られ、十字架で処刑される人生を生きた。しかし、神はそのイエスの復活によって、苦難の中にも「神が共におられる」「神は愛である」という希望のメッセージを伝えた。クリスマスは、そんなイエス・キリストの生涯の最初の物語である。

小羊学園は、今の時代にあつて忘れられがちな困難の中で生きる人たちに寄り添うことを使命として創立された。だからこそ小羊学園の物語も、イエス・キリストをモチーフにした物語でありたいと思っている。

小羊学園座談会 福祉従事者の接遇を考える

小羊学園が支援している多くの利用者は、障がい故にコミュニケーションが上手く取れなかったり、汲みとりにくかったりと、自分の思いを伝えることに難しさがあります。その中で、ご本人のニーズを抽出し、暮らしや育ちを支えるために福祉従事者として何が大切なのか、アフフォロー管理者に集まってお話を聞かせて頂きました。

◇進行

古橋 誠(支援センターわかぎ施設長)

◇座談会メンバー

舟橋 暢(三方原スクエア支援課長)

鈴木龍一(オリープの樹施設長)

紅谷 純(小羊デイケアホーム施設長)

古橋…本日はお集まり頂きありがとうございます。最近の福祉情勢をみますと日本でも国際連合の障害者権利条約批准にあわせ、権利擁護や虐待防止、差別解消などの法整備が進められています。そのことは障がいのある方たちが国民として普通の暮らしを保障するためには欠かせません。では、障がいのある方たちの専門的な支援を行う現場では、どのような意識を持ちながら日々支援されているのでしょうか。

舟橋…我々、小羊学園は総じて最重度の知的障がいをお持ちの方々をお預かりしております。三方原スクエアは児童部、成人部ともに5名のユニットケアを行い、なるべく家庭に近い環境を提供しています。しかし、入所している皆さんは、もちろん家族ではありません。他人同士で長いこと生活を共にしている特殊な生活共同体と云えます。古橋氏より冒頭に法律の話がありました。権利擁護や虐待防止については会議や定期的な施設内研修で良く、私から話すことはありますね。法律の理解はもちろんです。我々、支援員は利用者支援にあたって「何を大切にしていかなければならないのか？」を職員と一緒に考える場としています。

私がスタッフに解りやすく良く伝えられていることは、「あなた自身やあなたの家族が障害福祉サービスを利用したとして、されたくない支援はしない」という事です。「常に自分の利用者支援方法を客観的に見られるようになってほしい」とも伝えていきます。これは重要な観点で福祉従事者として、基本的な接遇を考える第一歩となっていると思います。



舟橋 暢氏

龍一…権利条約の批准が即現場の支援に影響してくることはほとんどないと思いますので、あまり実感としてはありませんが、日々利用者を支援している中で、人権侵害や権利擁護、虐待防止など意識しながら関わることは多くなりました。それは今の福祉情勢がそのような方向に向いていることや、保護者や地域の方々が人権侵害を積極的に考えるようになったので、現場の職員も必然と意識する状況になったのではないかと思います。また、様々な研修に参加していても、同様の虐待防止についての内容のものが多くなり、法律について学ぶ機会が多くなりました。その様なことから、権利条約の批准によって国内の制度が動き出しているということは、実感として持つことができます。

紅谷…丁寧な関わりや伝え方を意識して支援するように会議などで伝えさ

せて頂いています。デイケアホームでは、ある程度決められた活動の中から活動種目を利用者自身が選択をし、参加するという場面があります。障がい重い方が言葉で伝えられない時、その気持ちを代弁することや気持ちを察することが重要になってきます。職員が主体的に活動内容を決めてしまう傾向にならないよう、利用者の気持ちに寄り添い、ご本人に確認しながら活動を決めるように意識しています。現在の福祉情勢の中で、様々な法律の整備が進められると共に、我々の専門的な支援をする者として、知識の習得をしていかなければならないと思います。その一環として、三方原スクエアで行われているスタッフ養成講座に「デイケアホーム職員も参加させて頂き、共に学びながら現状課題の整理を議論させて頂いております。」

古橋…人権を尊重する際に言葉づかいや傾聴姿勢など、利用者の接遇で特に意識されることは何でしょうか。具体的な取り組みなどありましたら教えてください。

舟橋…意思決定支援という言葉が使われ、広がってきていると思います。利用者一人一人にしっかりと向き合うにあたって利用者を十分に理解していないと支援の方法が異なってしまう。三方原スクエアの利用者は自分の意思を伝える事を苦手な方が殆どですので、日々の表情や行動の分析が不可欠です。時には



鈴木 龍一 氏

利用者の行動を理解してあげられず頭を抱えてしまう事がありますが、問題とされる行動であっても必ず利用者の意思の表れからの事です。何故そのような行動を取らなければならぬのか等を検討するケース会議を行っています。また職員向けのスタッフ養成講座を毎月行い、職員として身につけなければならぬ知識を伝えていきます。まだ実現できていませんが接遇の専門家を講師として迎え、レクチャーを受ける内容の養成講座も検討されています。

龍一…事業所では接遇に関して、具体的な取組みはしていませんが日々支援の中で点検ができるように、お互いの言葉づかいを気にかけています。接遇が悪ければ、自然と施設の評価も悪くなります。利用していただける利用者がいるということは、支援や接遇がしっかりと出来ているという答えになると思います。

「今後も利用したい」と思っていた方が多くなり信頼される施設になるにはどのような接遇がふさわしいか、職員同士が日々点検して常に言葉づかいに気を付けていくことが、大切になってきます。

信頼される施設になるために、利用者に「また来たい」と思っていただけ施設になるために、日々接遇には意識をしていかなければならないと思っています。

紅谷…舟橋氏の言葉にもありますが、意思決定支援という意味では、自己決定や自己選択ということも大切にしなければなりません。言葉で伝えられなければ絵カードを使うなど工夫しながら支援しなくてはなりません。また、言葉遣いについても意識を向けております。送迎の際には、毎日家族の方と顔を合わせることも多いため、失礼の無いようにすることはもちろんですが、利用者支援の中でも声掛けの仕方や指示命令口調にならないように心がけております。利用者と一緒に生活していく中で、言葉遣いも崩れてくることがあります。親しみや友達感覚になつてしまい、あだ名で呼んでしまうことも少なくはありません。職員として基本的な接遇や言葉遣いは押さえておくようにしておきたいと思っています。

古橋…逆に、支援現場での難しさもあろうかと思えます。そのような場合、どのような対応をされていますか。

舟橋…利用者は自分の思いを真剣に支援者に伝えてきます。それが社会的に間違った伝え方の場合も良くありますね。そのような場面に利用者とのように向き合うかが課題となります。障害特性から突発的な行動を取られる方もおられます。日常生活支援同様課題場面での関わり方の一つ一つが我々支援員の専門性が問われるところだと思います。支援にあたって利用者、保護者との信頼関係を築き上げられる施設になつていかなければならないと感じています。

龍一…支援現場の中での難しさと言えば、利用者が他の利用者に対して、してはいけないことをしてしまった時の伝え方が難しいと思います。特に経験の浅い職員は、比較的してはいけないことを「いけない」と、そのまま伝えてしまい、お互いに理解し合えないままになることがあります。しかし、経験豊富な職員は伝え方を変えたり、そのような状況になる前に対応ができたりしています。利用者には「伝える」と「伝わった」との違いが、支援の中で理解していきけるチームを作っていくことが大切であると思います。そして、伝えることの楽しさや、利用者の気持ち共有できる職員になつていくことが大切だと思います。

紅谷…難しい課題だと思います。不適切な行動をしてしまう方への対応は難しく、伝え方も非常に難しいです。彼

らはその時の気持ちを上手に表現できず、また上手に伝達できないことを念頭に置きながら支援にあたらないければなりません。突発的な動きで表現します中で、職員側も心のゆとりを持ちながら、チームとしての対応方法を築いて、誰でも同じように支援することが大切だと考えます。ただ、無視してはいけない「彼らの気持ち」をどう受け止めるかが重要だと考えます。対利用者との関係性ももちろんありますが、彼らが不安にならないような環境設定や日課の組み立て方をより専門的に構築していくことも課題であると感じています。また、急にその時の気分などで、活動に参加したくないと訴える方への対応としても、決まっていることだから…と言ってしまう、活動内容が変更できる選択肢の準備も同時に必要になると感じています。



紅谷 純 氏

古橋…本日はお忙しい中ありがとうございます。それぞれの場にあつて、利用者の活動や暮らしが、その人らしく生き生きとされることを願っています。

明治ホールディングス株主さまから

お菓子を寄贈いただく

三方原スクエア

この度、明治ホールディングス株主様より、たくさんのお菓子やジュースの寄贈をいただきました。普段、お菓子屋さんに行く機会の少ない利用者のみなさんは、たくさんのお菓子に目をキラキラと輝かせていました。

いただいたお菓子は、12月のクリスマス会の時にみんなでいただく予定でしたが、待ちきれない児童部の利用者たち、こっそり、おいしいおやつをいただき幸せなひとときを過ごしました。

誠にありがとうございました。

また、今回の寄贈につきましてご協力をいただきました、(特非) 日本NPOセンター様、(特非) 静岡県ボランティア協会様にも感謝申し上げます。



法人児童部門研修行われる

法人内研修・研究委員会の一部門である児童家庭支援部門の今年度第2回目の研修会を11月29日に行いました。年間テーマとして「子どもの特性の理解と関わり方」として研修を行っています。当日は、午前中に浜松市発達相談支援センター所長の内山敏氏に「発達障がい児の愛着障害とインクルージョンの関係」というテーマで講義を受けました。親との愛着関係のあり

り方が子どもの育ちにとって大切であることを改めて学ぶ機会となりました。午後からは、「各事業所における現状と課題」についてグループワークを行いました。個々が日頃感じている課題を出し合い解決や対応について意見交換を行いました。

法人内の子ども関係の事業所から50名ほどが参加しました。経験年数や職種、支援している子どもたちの特性も多様な中、様々な角度からの意見を聞くことで視野を広げて考えることができ有意義な研修になりました。

浜松南エリアでのチャレンジ

浜松南エリアでの事業は、生活介護事業所マルカート・放課後支援事業所ドルチェ・相談支援事業所アグネスみなみであったが、今年度から二つ目の放課後支援の場として第2ドルチェを開設した。浜松市の建物のアンサンブル江之島から離れ、芳川地区(参野町)での第2ドルチェでの実践は、地域に根ざした事業の試みとして小さな前進である。

また、アグネスみなみでも浜松市からの委託相談について南区内で同じ委託相談をしているはまかぜ(医療法人

好生会)の相談員と一緒にチームをつくり「浜松南」という名称で市のモデル事業に取り組んでいる。「浜松南」

チームはモデル事業をさせてもらっていることもあり、将来の市の障害者相談のあり方を思いつつ、9月に長野県(上田市、松本市)、10月に愛知県半田市に視察研修にでかけた。これも未来へ踏み出した小さな一歩である。



長野視察 松本城を背景に

小羊学園を支える会

2014年度 寄付金報告

10月受付分 709,580円 (21件)
累計 3,675,858円 (153件)

小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座 00800-8-107785
口座名義 社会福祉法人小羊学園
ゆうちょ銀行 089店 当座預金0107785
口座名義 社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。

下記へご連絡ください。

小羊学園を支える会事務局(鈴木)
小羊学園本部 ☎ 053-584-3337

編集後記

先月末、小羊学園が東北支援で派遣させていただいた、南相馬市の「ビーンズ」の現場職員が浜松へ視察旅行にお見えになりました。職員の中には、自分たちの事業所以外を見学するのが始めてという職員もみえられ、浜松に来ることを楽しみにされていた。特にグループホームは、これから南相馬でも実現していきたい事業として運営・支援方法を熱心に学ばれていた。震災から3年半が過ぎ忘れがちになるが、風化させてはいけない。皆様も特に福島のことをお覚え続けていただけることを願う。寒さ厳しい折です。どうぞお身体ご自愛ください。(F)